

紫式部集 一冊

担当者 阿 部 秋 生・前 田 裕 子

本書は、昭和四十三年秋、本学の所有となり、現在「常磐松文庫」の中の一つとして本学図書館に襲蔵せられているものである。今日、『紫式部集』の伝本は三十数本が知られているが、その中で最も信頼すべき伝本であるという評価をえて、既に学界にもその書誌や本文は紹介されているが、今回改めて基礎的な書誌の調査をしたので、その結果を報告する。大要に特に変わるところはないが、一、二付け加える点があるように思われる。

一、『紫式部集』の伝本

『紫式部集』の伝本は、今日三十数本発見されているが、池田亀鑑博士は、十八本を各伝本の歌数、歌の配列、本文の性質などを基準にして分類し、第一類定家自筆本系統（定家の校定本を書写した旨の奥書等のある本）、第二类古本系統（本文の歌の欠けている空白部分に「本にやれてかたなし」等の註記のある本）、第三類雑纂本系統（紫式部集の歌の外に、赤染衛門集の歌や勅撰集入撰歌などが加わっている本）の三類とし、本文についていえば、第一類と第二類とは近似し、第三類はこれらと全く異っている、しかし、歌の配列の順序についていえば、第一類と第三類とはほぼ一致するが、第二類だけがこれらと大きく異なっている、しかも、その順序の違っている箇所は、必ず数首が群をなして違っており、その群の中での順序は第一類、第三類の順序と一致する、このことは、本来の『紫式部集』の歌の順序が、機械的原因によって崩れたことからこれらの異本が発生したことを意味するだろう、つまり、『紫式部集』は、本来、原本が幾通りかに分れていたために、諸伝本が三類にわかれたわけではなく、原本は一つで、それが転写、保

管の間の機械的原因によって三通りの写本ができて来たものと思われる——ということを述べていた（紫式部日記と家集について）。近年、南波浩氏は、池田博士のこの研究をうけて、その分類を大筋において認めた上で、

一、定家自筆本とは一種類だけではない。一面の行数にも十行・十二行・九行・八行・七行等の種類があり、本の形にも長方形のもの、枳形のものなどの種類があったとして、定家本（第一類）を五種に細分した。それらの諸本の中で、一面十行枳形本の本書（実践女子大本）と、これの忠実な転写本と思われる瑞光寺本とを第一種として立て、定家自筆本の中の一つとする。

二、第三類の諸本の中には雑纂的な性格のものもあるが、岡田本の如く雑纂的性格の部分の欠けている伝本があるので、この岡田本を第二種として立て、第三類全体は雑纂本系統と称するよりは、別本系統と称することが適當であるとする。

南波氏は、このような基準から、今日知られている伝本三八本を、三類一〇種に分類し、その一々を解説しておられる。その最初に、第一類第一種本として、本書が、他の伝本との比較の上でのことだが、歌の脱落も、本文の誤脱も少く、かつ書写年代も古く（書写年代の最も古いのは三条西家本である）、信頼しうる伝本として紹介されている（紫式部集の研究）。

二、本書の書誌

本書は、常磐松文庫の蔵書の一つで、縦一七糎、横一五・二糎の枳型本、綴葉装。紫の袱紗に包まれ、桐箱に納められている。その桐箱の蓋の中央に

紫式部集 手鑑 一冊

と墨書してある。この桐箱はそれほど古いものではない。

表紙は、薄茶色の地に、金糸で牡丹唐草文様を織り出した錦で、この表紙の左上に、「むらさぎ式部集」と墨書した題簽（縦九・八糎、横二糎）が貼ってある。表紙・裏表紙の見返しは金色の紙である。内題はない。

本文部分の料紙は鳥の子と思われる。綴葉装で、三括りからなる。第一括りは五枚二つ折り（一〇丁）で、その第一丁は表紙裏に貼りこまれている。その次が遊紙一丁（この遊紙を第一丁として数えてある）で、次丁の才から本文が書かれる。第二括りは六枚二つ折り（一二丁）で全部本文、第三括りは五枚二つ折り（一〇丁）で、その中八丁は本文と奥書（一面）で、残る二丁が遊紙である。計三二丁の中、第一丁が表表紙にとられているので、三一丁が、遊紙三丁（前一丁、後二丁）と本文、奥書の二八丁とにわかれる。

る。

本文は、一面十行書き、歌は、上句、下句で改行して二行書き、詞書は、歌より一字又は一・五字ほど下げて書く。所収歌は一二六首。伝本各類各種の中で最も歌数が多い。本文部分に書入れ、貼紙等はない。蔵書印等は、本学図書館のもの以外には見当たらない。

奥書と極札とがある。

奥書は、本文部分の最終丁ウ（第二十九丁ウ）に、次のようにある（口絵8参照）。

本云

以京極黃門定家卿筆跡本不違

一字至于行賦字賦雙紙勢分

如本令書写之于時延徳二年

十一月十日記之

癡老比丘判

天文廿五年夾鐘上澣書写之

この奥書は、右のように判読してみたが、二、三不審なところがある。

一行目の「筆」の次は「証本」の「証」とも読めるが、多くの方の意見のように「跡」であろう。「××筆跡本」と読むのは熟さない感もあるのと、「筆」と次の字との間が心持あいているかと思われるので、「京極黃門筆の証本」と訓んでもみたが、「証」と訓むには隣の画に不審がある。「跡」をこのような字形に崩すことは珍しいが、例のない崩し方ではない。

二行目の「雙」の筆画も異様だが、文脈からみても「雙紙」のつもりであろう。

五行目の署名の最初の字は、字形からいえば、「癪」の崩しともみえる。また多くの人は「癪」と宛てている。殊にこの本の臨写本かと思われる瑞光寺本の奥書（紫式部集の研究）口絵写真の字形は、「癪」の崩しとみるのが一案だと思わせる。だが、「癪」は「悪疾也」とか「瘡也」とか定義する。また「癪」は「狂也」と定義し、小児に「癪」といい、大人に「癪」というとあり、「癪癪」の意であるともいう。「×老比丘」とは謙退の自称であるには違いないが、「癪」や「癪」を使うのは、いくら謙退にしてもどぎつくなりすぎるのではなからうか。

もう一つの可能な訓み方は「癡」である。「癡」の崩しは、普通にはこの奥書の字形とはかなり距離がある。だが、この筆者の崩し方には、個人的な癖もあるらしく、「癡」の崩しの最後の画が、「頁」や「負」の崩しの形になることもある。意味の方からいうと、「癡」に「称顛狂病」ともあるが、本来は「不慧也」(説文)で、多くの人が謙称としてこの字を用いている。中国にも、「癡菴」(宋、祖覺・清、王鐸)、「癡叟」(元、顧諒)、「癡翁」(明、史忠)、「癡仙」(同上)などがあり、この外に、「癡仙道人」(清、王鐸)、「癡絶生」(元、王鐸)、「癡絶叟」(宋、顧禮)と使われた。日本の五山の禅僧に「癡元」「癡絶」「癡黙」「癡鈍」などがいた。「癡老比丘」か「癡老比丘」かはわからないが、「癡」と訓んでおいてよからう。

次には、判読したいわけではないが、最後の日附「天文廿五年」の「廿」の部分の紙が少し毛羽立ってみえる。つまり、「廿」は、一度書かれた字を削って消し、その上に書いたかに見える。「天文」という年号は、二十四年十月二十三日で「弘治」と改元されたということもあるので、この料紙の毛羽立ちが目につくのである。写真では判定しにくいですが、この「廿」は、この行の他の字とは墨色が違っているし、書風も違っていると考えられ、云ってみれば、この奥書の他の字よりも若い人の字ではないかと思われる。こまかに見ると、「廿」の右下の点も二重に打ってあるらしく、濃い墨と薄い墨とが部分的に重なっている。また、「廿」の横の画の右端の上にはみ出ているのも、この横の画とは墨色を異にしている(口絵8参照)。

写真でみると、「廿」と「五」とは切れ目なしに筆がつづいているように見えるが、原本では墨色を異にし、筆勢を異にしていると思われる。下に文字が書かれていたもののようであるが、その文字を推測したい。何故、改元のあったことを無視して「廿五年」としたのかも推測したい。改元を知らなかった人、「致仕の人か、世を捨てた人」と南波浩氏はいう。

右のように読んでみると、定家筆の伝本を、延徳二年(二四九〇)、「癡老比丘」が、一字違わず、「行数・字配り・雙紙の体裁」までを底本通りに書写したものの、臨写本に近いものを作ったというのが前段の奥書である。その肩に、「本云」とあるのは、本書(実践女子大本)の底本にすでにこの奥書があったことをいう。その延徳の写本を、「天文廿五年夾鐘上澣」に転写したのが本書である。

「天文廿五年」(一五五六)には、前述の如く疑問はあるが、今これを旧に戻すことはできないので、この日附をおおよその目途として、この筆者を一応探ってみることになるが、特に手懸りになるものはない。

極札が添えてある。その包紙には、

轉法輪三条殿公頼公

紫式部集極外題

とある。この紙包の中の極札（縦一四・六糎、横二・二糎）には、

轉法輪三条殿公頼公紫式部集

とあり、「紫式部集」の下二字にかかる瓢形の朱印は「隨道」の古体と認められるので、第三代畠山牛菴重好（享保十二年五月遁世）の極で、三条公頼をこの写本（紫式部集）の筆者に擬したものである。紙包の中のもう一枚の紙片（縦一七・三糎、横三・五糎）には、

三条

公頼公号後龍翔院天文十五年左大臣
從一位同廿年八月廿九日於防州

生害年五十七

と、公頼についての註記がある。牛菴の極に対する註の意味をもつものであろう。

公頼は、『公卿補任』によると、藤原（三条）実香の男、後柏原天皇の永正十一年（一五一四）、二十歳で從三位に叙せられ、天文十五年（一五四六）正月三十日、散位の前右大臣から左大臣（正二位）に転じたが、三月二十五日には辭退し、十六年從一位に叙せられているが、二十年（一五五一）の公頼の条に、

三条

同（藤）公頼五十八月廿九日於周防生害
四十云々号後龍翔院左大臣

とある。同じく、散位の前左大臣從一位藤原尹房の条にも、

二条

藤尹房五十前関白准三宮八月廿九日於周防義隆卿没落
六十之冠御生害云々号後大梁金剛院関白

とある。同じく散位の非参議從二位多々良義隆の条に、

大内

多々良義隆四十兵部卿大貳侍從九月二日於長門國自
五十害云々僕從謀叛云々

とある。大内義隆が陶隆房に襲われて長門大密寺で自尽した事件に尹房や公頼が巻きこまれて死んだことになる。

この事実によれば、公頼は天文二十年に死んでいるので、この写本の奥書にある「天文廿五年」には生存していない。従って、畠山牛菴の極にあるように三条公頼を本書の筆者とするならば、「天文廿五年」には何かの誤りがあると見なければならぬまい。その点で、前述したように「廿」が、本文・奥書とは別人の筆と見えることが、また改めて問題となる。「廿」の前にあった文字

は、「十」「廿」「卅」等の数字であろうが、「廿」でも「卅」でもありえないだろうから、結局は三谷邦明氏のいう如く「十」であろうかと思われるが、なぜ「廿」と書き改めたのかの説明はできない。作為とばかりは限るまい。また、「天文十五年」であるとしても、公頼を筆者と断定することは困難である。今は筆者不明としておく。筆者の個人名を定めることは困難だが、その筆蹟が、この奥書にある天文ごろ、室町時代末期のものとみることではできようであろう。

三、本書の特徴

本書の形態上、内容上の特徴二、三について述べておく。

(1) 本写本には脱落している歌

本書には一二六首の歌が掲載されている。『紫式部集』の諸伝本中では、最も収録歌数の多い写本であるが、多いとはいっても、紫式部の歌全部が完全にこの本に集められているわけではない。たとえば、本文の中に、「かへし」とあるだけで、その後、二行分とか四行分とかの空白のあるところもある。三類十種の伝本が同一原本から分れたものとするならば、この空白部分に入るべき歌、つまり一二六首以外に、本来この伝本にあった歌で、今は脱落しているものがあつたと考えねばなるまい。それらを個々に探ってみる。

a、17（なにはかた…）の次（五ウ）

「なにはかたむれたるとりの…」の歌の次の行に、「かへし」とあり、その後二行分ほど空白があつて、その次行から、「つくしにひせんといふところより…」という次の歌の詞書になる。定家自筆本系統第二種尊円本諸本では、この空白部分に「本ニウタナシ不審」などがある。だから、ここに、はじめは「返し」の歌があつたのであらうと思われるが、その歌がどういう歌であつたかは、三類十種の現存本すべてに欠けているのでわからない。この歌集を編集する時、ここに「返し」の歌を入れる予定にしておいて、その予定を果さなかつたというような場合を考えることもできるが、この詞書によれば、この「返し」の歌が紫式部の歌であるから、材料が手もとになかつたというような場合も考えにくい。「なにはかた」の歌をとつた勅撰集『統拾遺集』の詞書には、「津の國にまかれりける時、都なる女ともだちの許に遣しける／紫式部」（雑上、一二四）とあつて、この歌の作者は紫式部になるが、この家集の詞書によれば、前述の通りである。

b、51（たかさとの）の次（二三ウ）

本書によれば、「たがさとの春のたよりに」の歌の次には空白もなく次の52の歌の詞書「世中のさはがしきころ…」につづいているが、古本系諸本には、次のようにある。

さしあはせて物思はしげなりときく人を、ひとにつたへてとぶらひける

本にやれてかたなしと

八重やまぶきをおりて、ある所にたてまつれたるに

おりからをひとへにめづる花の色はうすきをみつうすきともみず（陽明文庫本）

とあって、その後が「世中のさはがしきころ…」という詞書につづく。ここに引用した部分（歌・詞書）は、本書を初めとする定家本系の諸本（二八本）にも、別本系（三本）にもなく、古本系（七本）にのみあるものである。本書（定家本系第一種）の場合も、本来はこれらの歌と詞書とをもっていたのであろうが、何かの理由で脱落し、空白部分もなくなってしまったのであろう。ただし、古本系に「本にやれてかたなし」と註記のある部分の歌がまず脱落し、次のある時期に、ある理由で、「をりからを…」という歌と詞書が、定家本系から脱落したと考えるべきなのであろうか。

c、78（わするゝは）の次（一九ウ）

「わするゝはうき世のつねと…」の歌の次には四行分の空白部分があって、次に「返し」とあって79（たがさとも…）という歌になる。この空白部分には、二行にわたる詞書と歌（二行）とがあった、それが脱落したものと考えられるが、その詞書や歌がどんなものであったのかは分らない。この空白がない古本系の陽明文庫本（62・63）では、「返し」の下に、「やれてなし」とあるが、この「返し」は、78「わするゝは…」につくものなのか、79「たが里も…」につくものなのかの解釈については改めて考慮する余地があるだろう。

d、104（神世には…）の次（二五オ）

「神世にはありもやしけん…」の歌と次の歌の詞書、「む月の三日うちよりいで…」との間には、空白はない。古本系（99・100）でもつづいていて、空白はない。定家本系尊円本もつづいている。だが、定家本第三種本の諸本では、二行分又は一行分の空白がここにある。そこに本来は歌があったものと思われるが、その歌がどんな歌であったのかは分らない。

e、123（ふればかく）の次（二八ウ）

本書の「ふればかくうさのみまさる」の歌と、次の歌の詞書「こせうしやうのきみの…」との間には、空白はない。だが、定家本系第二種尊円本諸本、古本系諸本、別本系諸本には、

いつくとも身をやるかたのしらねはうしとみつゝもなからふる哉（陽明文庫本114）

という歌がある（この歌の前に、「かへし」と入っている一本がある。不審である）。本書も、本来はこの歌をここにもっていたが、それが脱落したのではあるまいか。

以上五箇所には、本来、一首又は二首程度の歌があったのではないかと推測されるが、その推測が当たっているとしてみても、その歌がどんな歌であったかを推測しうるのは、bの「をりからを」とその詞書とeの「いつくとも」との二首にすぎない。

(2) 本書にあり、他本にはない歌

本書（第一類第一種）にだけあって、他種、他系統の本には全く収められていない歌は一首もない。本書の中の歌は、他の定家本系伝本にもあるか、さもなければ古本系伝本にある。逆にいえば、本書の歌の中には、他の定家本系（第二種、第五種）、古本系の伝本のどちらかには収められてないものがある。それらを拾い出してみると次のようになる。

a、第二、五種の定家本系諸本に見えない歌、

かへし 又のとしもてきたり

19 ゆきめくりあふをまつらのかゝみにはたれをかけつゝいのかしる

あふみのみつうみにてみをかさきといふところにあみをひくを見て

20 みをのうみにあみ引たみのてまもなくたちゐにつけてみやこゝひしも

又いそのはまにつるのこゑ／＼なくを

21 いそかくれおなしこゝろにたつそなくなおもひつる人やたれそも

夕たちしぬへしとてそらのくもりてひらめくに

22 かきくもりゆふたつなみのあらければうきたる舟そしつこゝろなき（六オ、ウ）

この四首は、定家本系の中では、第二種の三条家本（神宮文庫）等と第五種の群書類従本と六女歌集本とはある。こうなったのは、次のような事情による。

第二種本（尊円本）は、代表的な松平文庫本などによると、本文の後に、「表書書本初侍者書窓裏村円」とはじまる奥書（天文第八暮種下旬廿九日）と写本寸法（長さ五寸三分・横三寸七分）とを記し、その後、「かへし またのとしもてきたり」とはじめて、「かきくもり」の歌までに、次の歌（23）の詞書の一行目「しををつやまといふ道のいとしけきを」を加えた本文を引用し、次に右之分以他本校合之時書入、あひみんとおもふ心はまつらなる鏡の神や空にみゆらんにつき、しつのをのあやしきさまともしてなをからき道なりやと云を聞てのかみニアリ

とある、つまり松平文庫本（尊円本）にはなく、本書や古本系にある歌・詞書を記して、それらは「あひみんと…」と「しつのをの…」の間にあるべきなのだと位置を註記してあるのが、第一類第二種本（松平文庫本等）の形態的特徴である。ところが、この類この種の諸本の中三条家本等の数本には、第二種本としての特徴的な奥書もあり、「右之分…」という註記もあるが、その前にあげてあるべき歌と詞書（註記の「右之分」に相当するもので、ほぼ19～22の歌と詞書である）がない。というのは、第二種本である三条家本等には本来なかった歌と詞書（19～22のそれら）とを、三条家本等では、奥書が註記している本文中の位置に、書き入れてしまったので、奥書からは歌と詞書とを削ってしまったことを意味する。その点においては、これら三条家本等は、第二種本としての特徴的な形の崩れた写本になってしまったものである。

第五種本の中で、この四首の歌と詞書とをもっている群書類従本、六女歌集本とは、共に他本と校合されている本なので、第二種本と同じようなことがあったかに思われるのだが、実は校合に使った本の性格がはっきりしないので、断定的なことはいえない。いずれにしても、この両本は、校合によって、定家本第五種本としての純粹な形を失っているとみななければならぬ。

またいとうゑ／＼しきさまにてふるさとかへりてのちほのかにかたらひける人に

57 とちたりしいはまのこほりうちとけはをたえの水もかけみえしやは

かへし

58 み山へのはなふきまかふたに風にむすひし水もとけさらめやは

正月十日のほとにはるのうたゝまつれとありければまたいてたちもせぬかくれかにて

59 みよしのは春のけしきにかすめともむすほゝれたるゆきのした草（一四ウー一五ウ）

この三首は、第二～第五の定家本にはない。別本にもない。古本系統と定家本第一種本にあるだけである。本来の『紫式部集』にあった歌である。

b、古本系諸本に見えない歌

返し

61 つれ／＼となかめふる日はあをやきのいと／＼き世にみたれてそふる（一五ウ）

60の「うきことをおもひみたれてあをやきのいとひさしくもなりにけるかな」という「弁のおもと」（弁内侍か弁宰相か）の歌への返しである。別本・定家本系諸本には見えないが、古本系諸本には見えない歌である。

つちみかとのにて三十講の五巻五月五日にあたれりしに

65 たへなりやけふはさ月のいつかといつゝのまきにあへる御のりも

その夜いけのかゝり火にみあかしのひかりあひてひるよりもそこまでさやかなるにさうふのかいまめかしうにほひくれば

66 かゝり火のかけもさはかぬいけ水にいくちよすまむのりのひかりそ

おほやけことにいひまきらはすをむかひたまへる人はさしもおもふことのしたまふましきかたちありさまよはひのほとをいたうこゝろふかけにおもひみたれて

67 すめるいけのそこまでゝらすかゝりひのまはゆきまでもうきわか身かな（一六オ～一七オ）

この三首も、古本系諸本以外の諸本（定家本系・別本系）にはある歌である。（古本系諸本の後にある「日記歌」の中にもあるが、詞書に違いがある）

返し

69 ひとりあてなみたくみける水のおもにうきそはるらんかけやいつれそ

あかうなれはいりぬ長きねをつゝみて

70 なへて世のうきになかるゝあやめくさけふまでかゝるねはいかゝみる

かへし

71 なにことゝあやめはわかつてけふもなをたもとにあまるねこそたえせね（一七ウ～一八オ）

この三首も、定家本系の諸本、別本系諸本には揃ってあるものだが、古本系諸本には、本来なかったものようである（70・71は『日記歌』にはあるが詞書が違ふ）。古本系第二種の諸本には、巻末に70・71の二首をもっているものがあるが、その詞書は、「つほ

ねならひにすみ侍ける比、五月六日もろともになかめあかして、朝になかきねをつつみて紫式部につかはしける／上東門院少将「返し」とある。これは本書の70の詞書とは、文章が違うばかりでなく、書式も違っている。これは、『新古今和歌集』巻第三、夏の二二三・二二四の詞書である。つまり、古本系の第二種の諸本は、新古今集にある二首の歌と詞書とを巻末に引用増加したものである。従って、古本系諸本には、この三首は、本来なかったものとすべきである。

夜ふけて戸をたゞきし人つとめて

74 夜もすからくひなよりけになく／＼そまきのとくちにたゞきわひつる

かへし

75 たゞならしとはかりたゞく／＼ひなゆへあけてはいかにくやしからまし（二八ウ）

この贈答二首も、定家本系・別本系諸本には見えるものであるが、古本系諸本には見えない歌と詞書である（『日記歌』の中にあるが、詞書が違っている）。

九月九日きくのわたをうへの御かたよりたまへるに

114 きくのつゆわかゆはかりにそてふれて花のあるしに千世はゆつらむ

しくれする日こ少将のみさとよきり

115 くまもなくなむるそらもかきくらしにしのふるしくれなるらむ

返し

116 ことはりのしくれのそらはくもまあれとなかむるそてそかはく世もなき

里にいてゝ大なこんのきみふみたまへるついでに

117 うきねせし水のうへのみこひしくてかものうはけにさえそおとらぬ

返し

118 うちはらふともなきころのねさめにはつかひをしそ夜はに恋しき（二六ウ～二七ウ）

この五首の中114を除く四首が、古本系第三種の橘常樹本にあるのは、陽明文庫本末尾の日記歌一七首中の「くもまなく」「ことはりの」「うきねせし」「うちはらふ」の四首と、これにつづく「としくれて」「すき物と」の二首を集の末尾に転記し、日記歌を一首としているからで、古本としての特徴を崩す所為である。

以上 a、b 二通りの型になるが、計二一首の歌と詞書とが、本書にもあることによって、『紫式部集』に本来あったものと確める、言葉をかえていえば、『紫式部集』の本来の形を変えるものになっているわけである。

(3) 濁点、振仮名

a、60 べんのおもと（弁のおもと）（一五ウ②）

b、99 ぢしうさいやう（侍従宰相）（二三ウ⑧）

c、106 べんさいししやう（弁宰相）（二五ウ②）

d、124 かゞせうなこん（加賀少納言）（二八ウ④）

濁点はこの四箇所だけである。この濁点記号は、文字の右肩にゝと点を四つ並べて打つものである。その他の記号は普通である。

振仮名は「三十講の五卷^{くわん}」とあるだけである。他本との校合の跡もない。

(4) 左注

歌集の場合、ある歌の左注と次の歌の詞書とをはっきり区別しにくい場合がある。本書は、左注の末尾と、次の詞書とを改行することで区別している。時には、区別しないで続けておく方が適当なのかと思われる場合もあるが、本書は一首ずつの詞書、左注として明確にすることを原則としているらしい。一例をあげるならば、

ふみのうへにしゆといふ物をつふ／＼とそゝきかけてなみたのいろなど」かきたる人のかへりことに

31 くれなゐのなみたそいとゝうとまるゝうつるこゝろのいろに見ゆれば

もとより人のむすめをえたる人」なりけり

ふみちらしけりとぎゝてありし文」^(お)もとよりあつめてをこせすは返」事かゝしとことばにてのみいひや」りければみなをこす^(お)とていみしく」ゑんしたりければむ月十日はかりの」ことなりけり

32 とちたりしうへのうすらひとけなからさはたえねとや山のした水

とある如きが本書の慣行である。ここは区別する方がよいと思うが、左注と次の詞書とがもうすこし近いトピックのものである場合には、区別せず、一続きにしておく方が効果的であるという場合もあるだろう。しかし、本書は家集として、左注・詞書の役割

を歴然とさせる方針のように思われる。

(5) 日記歌

古本系の諸本の中には、巻末に「日記歌」と標題して、『紫式部日記』の中に見えて、古本系『紫式部集』に収められていない歌などをまとめているものもある。だが、本書は、その種のものをもっていない。

以上、本書の特徴を列挙したが、これを要するに、『紫式部集』の中では、最も歌数も多く、脱落した歌や詞書もあるようだが、他の諸伝本に比べると脱落歌は少く、他の諸伝本が脱落させてしまった歌をもっており、誤写・誤字も零ではないが、他の諸伝本に比較すると非常に少ないというべきで、完璧とはいえないが、『紫式部集』の原形を知りうる殆ど唯一の伝本である。

南波浩氏が、昭和四十二年紹介された瑞光寺本は、本書を丁寧に書写したものと考えられるが、綴糸が切れて、第十二丁と、第二十一丁、第二十二丁の三丁が脱落し、歌でいえば、44の歌の詞書の途中「かたかきたるうしろに」から47の歌の上の句「さをしかのしかならはせるはきなれや」までの三・五首と、84の歌の詞書「返し」から94の歌の上の句「おほかたのあきのあはれを思ひやれ」までの一〇・五首とが脱落している。しかし、両者を比較、検討することによって、本書、つまりは『紫式部集』の性格を明らかにすることができる。その意味で、貴重な資料である。

なお、本集および『紫式部集』全般に関しては、次のような調査、研究がすでにある。この調査を作成するに当たっても、多くの教示をえた。また、これらの調査に譲って、この報告では省略したこともある。

。池田亀鑑「紫式部日記と家集について」『学苑』昭28・10)

。池田亀鑑『紫式部日記』第二章第三節紫式部集 至文堂(昭36・11)

。三谷邦明「むらさき式部集」『古代文学論叢』第二輯 武蔵野書院(昭46・6)

。南波浩『紫式部集の研究』校異篇 伝本研究篇 (笠間叢書31) 笠間書院(昭47・9)

。南波浩『紫式部集』附大貳三位集 藤原惟規集 (岩波文庫) 岩波書店(昭48・10)

。山本利達『紫式部日記・紫式部集』(新潮日本古典集成) 新潮社(昭55・2)

〔白紙〕

〔白紙〕（左下ニ「実践女子大学図書館」ノ朱印）

1才
1ウ

1
はやうよりわらはともたちなりし人
にとしころへてゆきあひたるか
ほのかにて十月十日のほと月に
きおひてかへりにければ
めくりあひて見しやそれともわかぬまに
くもかくれにし夜はの月かけ

2
その人とをきところへいくなりけり
あきのはつる日きたるあかつきむし
のこゑあはれなり

2才

2
なきよはるまかきのむしもとめかたき
あぎのわかれやかなしかるらむ
さうのことしはしとかひたりける人
まいりて御てよりえむとある返事に
つゆしけきよもきか中のむしのねを
おほろけにてや人のたつねん
かたゝかへにわたりたる人のなまおほ
くしきことありとてかへりにける
つとめてあさかほの花をやるとて
おほつかなそれかあらぬかあけくれの
そらおほれするあさかほの花
返し てをみわかぬにやありけん
いつれそといろわくほとにあさかほの

3ウ

4

2ウ

5

2ウ

あるかなきかになるそわひしき

つくしへゆく人のむすめの

6
にしのうみをおもひやりつゝ月みれは
たゝになかるゝころにもあるかな
返し

7
にしへゆく月のたよりにたまつさの

かきたえめやはくものかよひち

はるかなるところにゆきやせんゆかす
やとおもひわつらふ人のやまさとより

8
もみちをおりてをこせたる

つゆふかくをく山さとのもみちはに
かよへるそてのいろをみせはや
かへし

9
あらしふくとを山さとのもみちはゝ
つゆもとまらんことのかたさよ

又その人の
もみちはをさそふあらしはゝやけれと
このしたならてゆくこゝろかは

10
ものおもひわつらふ人のうれへたる
返ことにしも月はかり

11
しもこほりとちたるころのみつくきは
えもかきやらぬこゝちのみして
返し

12
ゆかすともなをかきつめよしもこほり
みつのうへにておもひなかさん

3才

13 かもにまうてたるにほとゝきすなか
なんといふあけほのかたをかのかすゑ
おかしく見えけり
ほとゝきすこゑまつほとはかたをかの
もりのしづくにたちやぬれまし

4才』

14 はらへとのかみのかさりのみてくらに
うたてもまかふみゝはさみかな
あねなりし人なくなり又人のおとゝ
うしなひたるかかたみにゆきあひて
なきかゝはりにおもひかはさんといひけり
ふみのうへにあねきみとかき中の君
とかきかよはしけるかをのかしゝとをき
ところへゆきわかるゝによそなからわかれ
おしみて

4ウ』

15 きたへゆくかりのつはさにことつてよ
くものうはかきかきたえすして
返しはにしのうみの人なり

16 ゆきめくりたれもみやこにかへる山
いつはたとときくほとのはるけさ

5才』

17 つのくにといふ所よりをこせたりける
なにはかたむれたるとりのもろともに

たちあるものとおもはましかは
かへし

18 つくしにひせんといふところよりふみ
をこせたるをいとはるかなるところにて
見けりその返ことに

5ウ』

19 あひ見むとおもふこゝろはまつらなる
かゝみのかみやそらにみるらむ
かへし 又のとしもてきたり

20 ゆきめくりあふをまつらのかゝみには
たれをかけつゝいのるとかしる
あふみのみつうみにてみをかさきと
いふところにあみひくを見て

21 みをのうみにあみ引たみのてまもなく
たちゐにつけてみやこゝひしも
又いそのはまにつるのこゑ／＼なくを
いそかくれおなしこゝろにたつそなく

6才』

22 なにおもひいつる人やたれそも
夕たちしぬへしとてそらのくもり
てひらめくに

かきくもりゆふたつなみのあらければ
うきたる舟そしつこゝろなき

しほつ山といふみちのいとしけきを
しつのおのあやしきさまともして

23

なをからきみちなりやといふをきゝて
しりぬらむゆきゝにならすしほつ山
世にふるみちはからきものそと

6ウ』

24

水うみにおいつしまといふすききに
むかひてわらはへのうらといふいりうみの
おかしきをくちすさひに
おいつしま／＼もるかみやいさむらん
なみもさはかぬわらはへのうら

29

春なれとしらねのみゆきいやつもり
とくへきほとどのいつとなきかな
あふみのかみのむすめけさうすと
きく人のふたこゝろなしなとつねに
いひわたりければうるさくて
水うみのともよふちとりことならは
やそのみなどにこゑたえなせそ
うたゑにあまのしほやくかたをかき
てこりつみたるなけきのもとにかきて
かへしやる

8ウ』

25

こゝにかくひのゝすきむらうつむゆき
をしほの松にけふやまかへる
かへし

7オ』

26

をしほやままつのうは葉にけふやさは
みねのうすゆき花と見ゆらん
ふりつみていとむつかしきゆきを
かきすてゝ山のやうにしなしたるに
人／＼のほりてなをこれいてゝみた
まへといへは

31

よものうみにしほやくあまの心から
やくとはかゝるなけきをやつむ
ふみのうへにしゆといふ物をつふ／＼
とそゝきかけてなみたのいろなど
かきたる人のかへりことに
くれなゐのなみたそいと／＼とまるゝ
うつるこゝろのいろに見ゆれば
もとより人のむすめをえたる人
なりけり

8ウ』

27

ふるさとかへるやまちのそれならは
こゝろやゆくとゆきもみてまし
としかへりてからひと見にゆかむと
いひける人のはるはとくゝるものといか
てしらせたてまつらむといひたるに

7ウ』

28

ふみちらしけりとぎゝてありし文
ともとりあつめてをこせすは返
事かゝしとことはにてのまいひや
りければみなをこすといひみしく
ゑんしたりければむ月十日はかりの
ことなりけり

32

とちたりしうへのうすらひとけなから
さはたえねとや山のした水

9オ』

33

すかされていとくらうなりたるに
をこせたる

こち風にとくるはかりをそこ見ゆる
いしまの水はたえはたえなん

34

いまはものもきこえしとはらたち
たれはわらひてかへし

いひたえはさこそはたえめなにかその
みはらのいけをつゝみしもせん

35

夜中はかりに又

たけからぬ人かすなみはわきかへり
みはらのいけにたてとかひなし

9ウ』

36

見やりて

もあへすちりければもゝの花を
さくらをかめにさしてみるにとり

おりてみはちかまさりせよもゝの花
おもひくまなきさくらおしまし

37

返し人

もゝといふ名もあるものをときのまに
ちるさくらにもおもひおとさし

花のちるころなしのはなといふも桜
もゆふくれの風のさはきにいつれと

見えぬいろなるを

38

花といはゝいつれかにほひなしとみむ

10オ』

ちりかふいろのことならなくに

とをきところへゆきにし人のなくな
りにけるをおやはらからなとかへり
きてかなしきこといひたるに

39

いつかたのくもちときかはたつねまし
つらはなれけんかりかゆくゑを

10ウ』

こそよりうすにひなる人に女院かく
かくれさせたまへるはるいたうかすみ
たる夕ぐれに人のさしをかせたる

40

くものうへも物おもふはるはすみそめに
かすむそらさへあはれなるかな

返し

41

なにかこのほとなきそてをぬらすらん
かすみのころもなへてきる世に

なくなりし人のむすめのおやの
てかきつけたりけるものを見て

11オ』

いひたりし

ゆふきりにみしまかくれしをしのこの
あとをみる／＼まとはるゝかな

42

おなし人あれたるやとのさくらの
おもしろきこととおりてをこせ

たるに

43

ちるはなをなけし人はこのもとの
さひしきことやかねてしりけむ

おもひたえせぬとなき人のいひける

ことを思ひいてたるなり

ゑにものゝけつきたる女のみにくき
かたかきたるうしろにおにゝなりたる
もとのめをこほうしのしはりたるかた
かきておとこはきやうよみてものゝ
けせめたるところを見て

なき人にかことはかけてわつらふも
をのかこゝろのおにゝやはあらぬ
返し

ことはりやきみかこゝろのやみなれは
おにのかけとはしるくみゆらむ

ゑにむめの花見るとて女つまとをし
あけて二三人ゐたるにみな人ゝ
ねたるけしきかいたるにいとさた

すぎたるおもとのつらつゑついでなか
めたるかたあるところ

春の夜のやみのまとひにいろならぬ
こゝろにはなのかをそしめつる

おなしゑにさかのはな見る女くる
まありなれたるわらはのはきの花に
たちよりておりたるところ

さをしかのしかならはせるはきなれや
たちよるからにをのれおれふす

世のはかなきことをなけくころみち
のくに名あるところゝかいたるをみ

11
ウ』

てしほかま

みし人のけふりとなりしゆふへより
なそむつましきしほかまのうら

かたたゝきわつらひてかへりにける
人のつとめて

世とゝもにあらき風ふくにしのうみも
いそへになみはよせすとや見し

とうらみたりけるかへりこと
かへりてはおもひしりぬやいはか

うきてよりけるぎしのあたなみ
としかへりてかとはあきぬやといひ
たるに

たかさとの春のたよりにうくひすの
かすみにとつるやとをとふらむ

世中のさはかしきころあさかほ
を人のもとへやるとて

きえぬまの身をもしるゝあさかほの
つゆとあらそふ世をなけくかな

世をつねなしなとおもふ人のおさな
き人のなやみけるにからたけといふ
ものかめにさしたる女はらのいのり
けるをみて

わか竹のおいゆくすゑをいのるかな
この世をうしといとふものから
身をおもはすなりとなけくことの

13
オ』

13
ウ』

やう／＼のめにひたふるのさま
なるをおもひける

14
才』

かすならぬこゝろに身をはまかせねと
身にしたかふは心なりけり

こゝろたにいかなる身にかゝなふらむ
おもひしれともおもひしられす

はしめてうちわたりをみるにも
ものゝあはれなれは

身のうさはこゝろのうちにしたひきて
いまこゝのへそおもひみたるゝ

またいとうゐ／＼しきさまにてふる
さとかへりてのちほのかにかたら

ひける人に
とちたりしいはまのこほりうちとけは

をたえの水もかけみえしやは
かへし

み山へのはなふきまかふたに風に
むすひし水もとけさらめやは

正月十日のほとにはるのうたゝてまつ
れとありければまたいてたちも

せぬかくれかにて
みよしのは春のけしきにかすめとも

むすはれたるゆきのした草
やよひはかりに宮のべんのおもと

いつかまいりたまふなとかきて

60

うきことをおもひみたれてあをやぎの
いとひさしくもなりにけるかな

61

つれ／＼となかめふる日はあをやぎの
いとゝうき世にみたれてそふる

62

かはかり思おもうしぬへき身をいといたう
も上すめくかなといひける人を
きゝて

63

わりなしや人こそ人といはさらめ
身つから身をやおもひすつへき
くすたまをこすとして

64

しのひつるねそあらはるゝあやめくさ
いはぬにくちてやみぬへければ
返し

65

けふはかくひきけるものをあやめくさ
わかみかくれにぬれわたりつる
つちみかとのにて三十講かうの五巻くへん五

66

月五日にあたれりしに
たへなりやけふはさ月のいつかとして
いつゝのまきのあへる御のりも

67

その夜いけのかゝり火にみあかしの
ひかりあひてひるよりもそこまで
さやかなるにさうふのかいまめかし

68

うにほひくれは
かゝり火のかけもさはかぬいけ水に

16
才』

15
ウ』

いくちよすまむのりのひかりそ

おほやけことにいひまきはすをむ
かひたまへる人はさしもおもふこともの

したまふましきかたちありさま

よはひのほとをいたうこゝろふかけに

おもひみたれて

67
すめるいけのそこまでゝらすかゝりひの

まはゆきまでもうきわか身かな

やう／＼あけゆくほとにわたとのに

きてつほねのしたよりいつる水を

かうらんをゝさへてしはし見ゐたれは

そらのけしきはる秋のかすみにも

きりにもおとらぬころほひなり

こせうしやうのすみのかうしをうち

たゝきたれはゝなちてをしおろし

たまへりもろともにおりゐてなかも

ゐたり

68
かけ見てもうきわかなみたおちそひて

かことかましきたきのをとかな

返し

69
ひとりゐてなみたみける水のおもに

うきそはるらんかけやいつれそ

あかうなれはいりぬ長きねをつゝみて

なへて世のうきになるゝあやめくさ

けふまでかゝるねはいかゝみる

16
ウ』

17
オ』

17
ウ』

かへし

71
なにことゝあやめはわかつてけふもなを
たもとにあまるねこそたえせね

うちにくひなのなくを七八日の夕

つく夜にこせうしやうのきみ

72
あまとのとの月のかよひちさゝねとも

いかなるかたにたゝくくひなそ

返し

73
まきの戸もさゝてやすらふ月かけに

なにをあかすとたゝくゝゐなそ

夜ふけて戸をたゝきし人つと

めて

74
夜もすからくひなよりけになく／＼そ

まきのとくちにたゝきわひつる

かへし

75
たゝならしとはかりたゝくゝひなゆへ

あけてはいかにくやしからまし

あさきりのおかしきほとにおまへの

はなともいろ／＼にみたれたる中に

をみなへしいとさかりなるをとの御らん

してひとえたおらせさせたまひてき

ちやうのかみよりこれたゝにかへすなどて

たまはせたり

76
をみなへしさかりのいろをみるからに

つゆのわきける身こそしらるれ

18
ウ』

18
ウ』

77

とかきつけたるをいとく
しらつゆはわきてもをかしをみなへし
こゝろからにやいろのそむらむ
ひさしくをとつれぬ人をおもひいて
たるおり

19才

78

わするゝはうき世のつねとおもふにも
身をやるかたのなきそわひぬる

20ウ

79

返し

たかきともとひもやくるとほとゝきす
こゝろのかきりまちそわひにし

19ウ

80

みやかのかたへとてかへる山こえける
によひさかといふなるところのわりなき
かけちにこしもかきわつらふをお
そろしとおもふにさるのこの葉の中
よりいとおほくいてきたれば

20才

81

ましもなををちかた人のこゑかはせ
われこしわふるたこのよひさか
水うみにていふきの山のゆきいと
しらく見ゆるを

82

そとはのとしへたるかまろひたうれつゝ
人にふまるゝを
こゝろあてにあなかたしけなこけむせる
ほとけのみかほそとはみえねと
人の

83

けちかくてたれもこゝろは見えにけん
ことはへたてぬちきりともかな
返し

84

へたてしとならひしほとになつ衣
うすきこゝろをまつしられぬる

85

みねさむみいはまこほれるたに水の
ゆくすゑしもそふかくなるらん

86

みやの御うふやいつかの夜月のひか
りさへことにくまなき水のうへのはし
にかむたちめとのよりはしめたて
まつりてゑひみたれのゝしりたまふ
さか月のおりにさしいつ
めつらしきひかりさしそふさかつきは
もちなからこそ千世をめぐらめ

21才

87

又の夜月のくまなきにわか人たち
ふねにのりてあそふを見やるなか
しまの松のねにさしめくるほとおかし
くみゆれば
くもりなくちとせにすめる水のおもに
やとれる月のかげものとけし

御いかの夜とのゝうたよめとのたまは

すれは

88 いかにかゝかそへやるへきやちとせの

あまりひさしき君か御世をは

とのゝ御

89 あしたつのはひしあらはきみか代の

ちとせのかすもかそへとりてむ

たまさかにかへりことしたりけり人

のちに又もかゝさりけるにおとこ

90 おり／＼にかくとは見えてさゝかにの

いかにおもへはたゆるなるらん

返し 九月つこもりになりけり

91 しもかれのあさちにまかふさゝかにの

いかなるおりにかくとみゆらん

なにのおりにか人の返ことに

92 いるかたはさやかなりける月かけを

うはの空にもまぢしよひかな

返し

93 さしてゆく山のはもみなかきくもり

こゝろもそらにきえし月かけ

又おなしすち九月ゝあかき夜

94 おほかたのあきのあはれを思ひやれ

月にこゝろはあくかれぬとも

六月はかりなてしこの花をみて

95 かきはあれさひしさまさとこ夏に

21
ウ』

22
オ』

つゆをきそはん秋まてはみし

ものやおもふと人のとひたまへる返事

になか月つこもり

96 はなすゝき葉わけのつゆやなにゝかく

かれゆく野へにきえとまるらむ

わつらふことあるころなりけり

かひぬまのいけといふ所なんあると人

のあやしきうたかたりするをきゝて

心みによまむといふ

97 世にふるになそかひぬまのいけらしと

おもひそしつむそこはしらねと

又心ちよけにいひなさんとして

98 こゝろゆく水のけしきはけふそみる

こや世にへつるかひぬまのいけ

ぢしうさいしやうの五せちのつほねみや

のおまへいとけちかきにこうきてんの

うきやうかひと夜しるきさまにてありし

ことなと人／＼いひたてゝ日かけをやる

さしまぎらはすへきあふきなどそへて

おほかりしとよのみや人さしわきて

しるき日かけをあはれとそみし

中將せうしやうと名ある人々のおなし

ほそとのにすみて少將のきみをよな

／＼あひつゝかたらふをきゝてとなり

の中將

23
オ』

23
ウ』

100 みかさ山おなしふもとをさしわきて
かすみなたにのへたてつるかな

返し

101 さしこえていることかたみゝかさ山
かすみふぎとく風をこそまで

102 こう梅をおりてさとよりまいらすとて
(マメ) むまれ木のしたにやつるゝむめの花
かをたにちらせくものうへまで

う月にやへさけるさくらはなを
内にて

103 こゝのへにゝほふをみればさくらかり
かさねてきたるはるのさかりか

さくらはななのまつりの日までちり
のこりたるつかひのせうしやうのかさし
にたまふとて葉にかく

104 神世にはありもやしけん山さくら
けふのかさしにおれるためしは

む月の三日うちよりいてゝふるさとのたゝ
しはしのほとにこよなうちりつもり
あれまさりにけるをこいみもしあへず
あらためてけふしもゝのゝかなしきは
身のうさや又さまかはりぬる

五せちのほとまいらぬをくちおしなと
べんさいしやうのきみのゝたまへるに
めつらしときみしおもはゝきて見えむ

24才

24ウ

25才

107 すれるころものほとすぎぬとも
かへし

さらはきみやまゐのころもすぎぬとも
こひしきほとにきてもみえなん
人のをこそせたる

108 うちしのひなけきあかせはしのゝめの
ほからかにたにゆめをみぬかな
七月ついたちころあけほの成けり
返し

25ウ

109 しのゝめのそらきりわたりいつしかと
秋のけしきに世はなりにけり

七日

110 おほかたにおもへはゆゝしあまの川
けふのあふせはうらやまれけり
返し

111 あまの河あふせはよそのくもゐにて
たえぬちぎりし世ゝにあせずは

26才

かとのまへよりわたるとてうちとけたらん
を見むとあるにかきつけて返しやる
なをさりのたよりにとはむひとことに
うちとけてしもみえしとおもふ

月見るあしたいかにいひたるにか

夜こめをもゆめといひしはたれなれや
秋の月にもいかてかは見し

九月九日きくのわたをうへの御かた

114 よりたまへるに

きくのつゆわかゆはかりにそてふれて
花のあるしに千世はゆつらむ

115 しくれする目こ少将のきみさとより
(マヤ) くまもなくなかむるそらもかきくらし
いかにしのふるしくれなるらむ

返し

116 ことはりのしくれのそらはくもまあれと

なかむるそてそかはく世もなき

里にいてゝ大なこんのきみふみたま
へるついでに

117 うきねせし水のうへのみこひしくて

かものうはけにさえそおとらぬ

返し

118 うちはらふともなきころのねさめには

つかひしをしそ夜はに恋しき

又いかなりしにか

119 なにはかりこゝろつくしになかめねと

みしにくれぬるあきの月かけ

すまひ御らんする目内にて

120 たつきなきたひのそらなるすまををは

あめもよにとふ人もあらしな

返し

121 いとむ人あまたきこゆるもゝしきの

すまゐうしとはおもひしるやは

26ウ』

27オ』

122 あめふりてその日は御らんとゝまりに
けりあいなのおほやけことゝもや
はつゆきふりたる夕くれに人の
こひわひてありふるほとのはつつきは
きえぬるかそうたかはれける

返し

123 ふれはかくうさのみまさる世をしらて

あれたるにはにつもるはつゆき

こせうしやうのきみのかきたまへりし

うちとけふみのものゝ中なるを見つ

けてかゝせうなこんのもとに

124 くれぬまの身をおもはて人の世の

あはれをしるそかつはかなしき

125 たれか世になからへてみむかきとめし

あとはきえせぬかたみなれとも

返し

126 なき人をしのふることといつまでそ

けふのあはれはあすのわか身を

29オ』

28ウ』

本云
以京極黄門定家卿筆証本不違

一字至于行賦字賦雙紙勢分

如本令書写之于時延徳二年

十一月十日記之

癡老比丘判

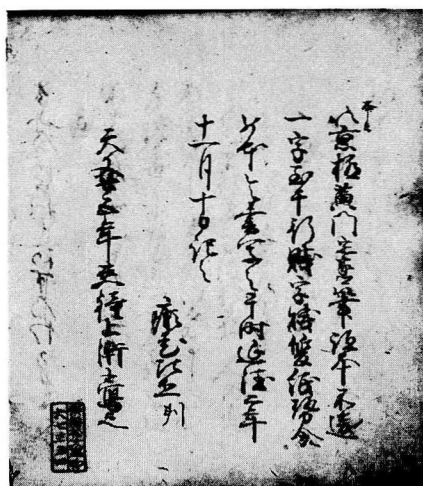
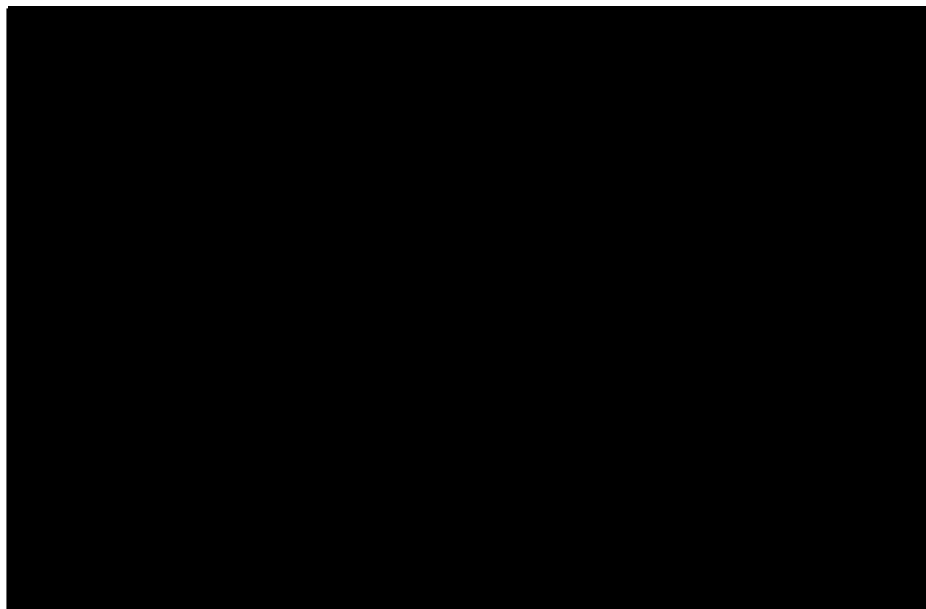
天文廿五年夾鐘上澣書寫之

(常磐松文庫朱印)

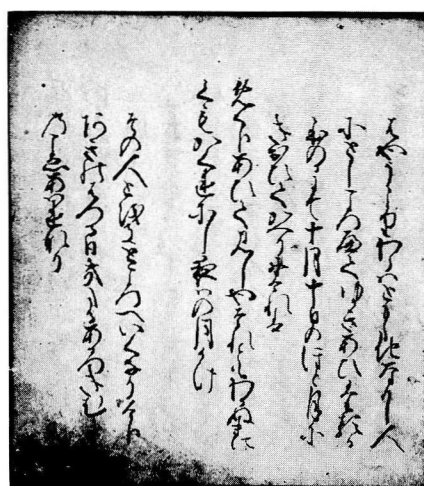
29
ウ』

ウ 31オ ウ 30オ

遊紙



口絵8 紫式部集奥書（第29丁ウ）



口絵7 紫式部集卷頭（第2丁オ）